

令和4(2022)年度 卒業生アンケート分析結果

2022/10/15

IR センター

(卒業生アンケート)

令和4(2022)年8月に、卒業生アンケートがFD委員会によって実施された。調査対象者は、卒業後5年、および10年を経過した卒業(修了)生であった。調査の目的は、「在学中に身に付けた能力及び資質並びに当該能力等の実社会での有用度、社会人として必要なこと等について、意見を聴取し、もって本学の教育の効果の検証に資すること」とされた。285名に対して調査が実施され、41名から回答があった。

集計・分析の結果、「知的基礎力」に関しては、聞く力・話す力、要約・記述表現力、理解力・判断力、観察力・分析力、調査・情報収集力、感性・創造表現力について、身についたとする回答の割合が相対的に高い傾向であった。一方、読解力、論理的思考力、実験・試行力については、どちらとも言えないとする回答の割合が高く、身に付いたとする回答の割合が相対的に低い傾向であった。この結果を令和3年度の結果と比較すると、聞く力・話す力、理解力・判断力、観察力・分析力、調査・情報収集力、感性・創造表現力については、一貫して、身についたとする回答の割合が高い傾向が認められた。これに対して、読解力、論理的思考力については、一貫して、どちらとも言えないとする回答の割合が高い傾向が認められた。

「社会人基礎力」に関しては、社会適応・常識力、コミュニケーション力、社会貢献の心、実践力が身についたとする回答の割合が相対的に高い傾向であった。これに対して、問題発見・価値判断力、問題解決・企画構成力、社会的実行力、内省・自己修正力、国際理解力については、どちらとも言えないとする割合が相対的に高い傾向であった。この結果を令和3年度の結果と比較すると、社会適応・常識力、コミュニケーション力、社会貢献の心、実践力については、一貫して、身についたとする回答の割合が高い傾向が認められた。一方、問題発見・価値判断力、内省・自己修正力、国際理解力については、一貫して、どちらとも言えないとする回答の割合が高い傾向が認められ、改善が必要であることが認められた。

今回の調査結果は、自由記述も含めて、学修・教育の成果を検証し、今後の教育内容と方法の改善に多くの示唆を提供すると考えられる。